



再歩

～再建までのみち～

かん かつなり はるこ
菅 克成 さん(77) 治子 さん(77)
行政区：下 町

「自分の家で過ごしたい」

白を基調とした落ち着いた外観。今回伺った菅さんの新居は、約19坪と二人暮らしには不便のない広さです。

震災当日は、これまで欠かさずに出席してきた同窓会を翌日に控え、楽しみにしていた同級生の夫婦でしたが、喜寿を迎えた記念すべき年に出席することは叶わず、破損した家具や食器などの片づけに追われました。記念写真を撮れなかったことが大変悔やまれるそうです。

約4か月間、車中泊や町内の親族の家で過ごした二人。「親戚や知り合いが遠方の物件を紹介してくれましたが、木山の校区会長をしているため、地元を離れるわけにはいきませんでした」と、克成さんは言います。しばらくは、近隣住民の避難先の把握や支援助物資の分配などに奔走しました。

「楽しかったですよ」
一年半に及び仮設団地での生活を振り返る治子さん。「知り合った人たちと話をしたり、一緒に散歩や体操をするなど、仲良く付き合えることが、仮設生活での心の支えになっていました」と、その時の心境を語ってくれました。

「自分の家で過ごしたい」
仮設住宅で暮らしていく中で、仮住まいや賃貸でなく、自宅を再建したい

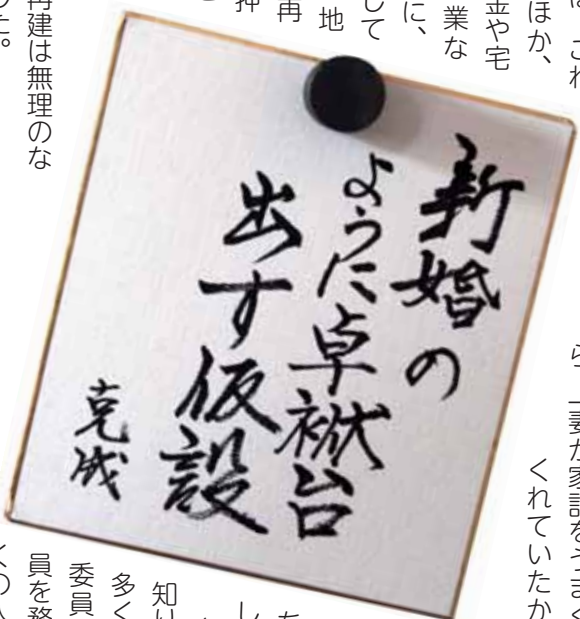
との気持ち徐々に高まり、二人は新築を決意しました。

再建資金には、これまでの蓄えのほか、生活再建支援金や宅地復旧支援事業などを利用。特に、万一の備えとして加入していた地震保険が自宅再建の大きな後押しになったと言います。住宅ローンは組まず、今後の生活を考え、再建は無理のないよう進めました。

菅さん宅の隣には、一足早く完成した息子夫婦の新居があります。「隣同士は、以前と変わりません。『小学5年生になる孫が、毎朝、『行ってきまーす』と声をかけてくれるんですよ』と治子さんは目を細めます。

二人のこれからの楽しみは、孫の成長を間近で見守ることと、グラウンドゴルフやカラオケ、川柳などの趣味を楽しむことだそうです。仮設団地で知り合った人たちとの交流も続けていきたいと言います。

何よりも晩酌が楽しみという克成さ



んは、「震災後、久しぶりに飲んだ焼酎のつまさに、当たり前に晩酌ができる日常のありがたさを痛感しました」としみじみと話し、部屋を見上げながら、「妻が家計をうまくやりくりしてくれていたから今があるんです」と、今日まで支え合ってきたパートナーへの感謝の気持ちを口にしませんでした。

多彩な趣味で知り合った友人も多く、過去に民生委員や体育協会役員を務めるなど、多くの人と関わってきた二人。仮設団地での生活を経て、人の輪はさらに大きくなりました。話を伺う中で、お互いを、家族を、そして人とのつながりを大切にしてきた二人の心がひしひしと伝わってきました。

「これからも晩酌の準備をよろしく」。そう言って夫婦が笑い合う温かいリビング。その白く真新しい壁面には、子どもや孫たちと撮ったたくさんさんの写真が、大事に飾られています。

新しい住まいになり、二人はこれからも変わらず、笑顔に満ちた暮らしを送ることでしょう。